

---

# 野良猫

烏野 某

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

野良猫

### 【Nコード】

N9733V

### 【作者名】

烏野 某

### 【あらすじ】

ある「野良猫」を拾った少年の話。

## （前書き）

友人たちとやっているサイトに載せている短編です。

「この間、猫を拾ったんだ」

昼休み、クラスメイトたちの声が溢れる教室。

コンビニのパンを齧りながら、霧島はふいにそんな話を口にした。窓を眺めながらの言葉だったので、正面に座っている赤松は最初自分に向けられたものだとは気付かなかった。弁当をつつこうとした箸を止めて、少し丸くなった目を友人に向ける。

「猫？ お前、猫好きだったっけ？」

「こつ見えて犬よりも猫派なんだ」

と聞いてもいないことを答える霧島。またか、と赤松はバレないように小さく息を吐く。

この少年は時々、赤松にとってどうでもいいことを唐突に放す癖があった。大抵は「知るかそんなの」と一蹴できる内容で、最近では適当に相槌を返してやりすごしている。

そんな赤松に気付かないまま、霧島は続けて言った。

「じつに可愛いらしいというか、生意気というか……まあ、そんな感じの猫なんだ。いるだろ？ 毛並はいいくせに、やたらと性格が悪いやつ」

「ああ、そうだな。で、その猫、どこで拾ったんだ？」

霧島の口に再びパンが入れられたので、質問への答えは十秒ほど遅れることになった。パンを咀嚼しながら、その時の記憶を思い出しているようだった。

会話が無くなり静かになった二人の横を、教室を出ようとする女子生徒たちが通り過ぎていった。

「確か、駅前だったかな」

口の中身をジュースで流し込み、霧島は言った。

「バイトの帰りに駅の近くを通ったところで見つけたんだ。いかにも行くあてが無いような感じでさ。寂しそうにしてた」

「んで、可愛そうになったから拾ったのか」

「いや、最初はそんな気はなかったよ。別に興味も無かったし、そのまま通り過ぎようとしたんだ。今思うと、無視するなんて選択をしなくてよかったと思うけど」

「へえ」

赤松の箸が、弁当箱の隅にあったソーセージを挟んだ。

「じゃあ、何で拾おうと思ったんだよ」

「放っておくと危ないと思ったからさ。そのまま通り過ぎようとしたら、変なやつらがそいつに絡んできたんだ」

「いや、別に変な、というほどではなかったかな、と付け加える。中身のなくなったパンの袋をクシャリと握り潰し、コンビニ袋の中

に放り入れた。

「たぶん隣り町の高校の生徒だったと思う。他校の制服にはたいして興味無いからあまり覚えてないけど、この辺りでは見ない顔だったからね」

それはお前が知らないだけで、この学校の生徒だった可能性もあるんじゃないか？ と赤松は思ったが、口にすることはなかった。何故かは知らないが、霧島はこの町内に住んでいる人の顔をだいたいは覚えていて、だから町の住人とそうでない人の見分けが簡単につくのだという。

どうにも胡散臭い話だが、赤松は彼が嘘を吐いたり見栄を張ったりするような人間でないことはよく知っている。だから（多少過剰にした部分はあるかもしれないが）本当にそうなんだろう、と納得する。

「そういえば、あの子もこの辺りに住んでる子じゃなかったよ。顔を見てすぐ分かった」

「あの子って、猫のことか？ お前、猫の顔まで分かるのかよ」

さすがにそれは嘘だろう、と疑問の目を寄せる赤松。

本当だって、と霧島は苦笑し、

「後で直接聞いたから、間違いないよ。嘘をついていなければの話だけど」

と言った。

「へえ」

相槌を打ちつつ、赤松は彼の奇妙な言い回しに内心で首をかしげた。

その言い方だと、まるで猫がそう言ったようではないか。

「まあいいか……で、結果から考えるに、お前はそれを助けたんだな？」

「ああ。さすがに可愛そうになったし、色々とうるさかったしね」

当時のことを思い出したのか、霧島の眉間にわずかに皺が寄った。めずらしく不快そうな表情だ。

「あの」霧島をこんな表情にさせるとは、その他校の生徒たちはよほど酷い態度を取っていたのだろう。

まあ、猫に手を出すような奴らだしなあ。

箸を持った手で顔を覆い、赤松は顔も知らない他校の生徒たちへと同情の念を送った。

見た目は細く、性格は穏やかな霧島だが、一度怒った時はそれはもう、まさしく天国が地獄となったような変貌を遂げるのだ。しかも見た目のわりに喧嘩慣れしており、悪魔、または修羅と化した彼が振るう暴力は、それなりに鍛えた大人であつても容易に止めることはできない。

今から半年ほど前に、町内を騒がせていたある暴走族グループがいた。彼らは深夜の町をバイクで走り回り、騒音を撒き散らしていた。時には仕事や学校帰りの人たちに暴力を振るったこともあり、それが霧島の怒りに触れてしまい　結果、その暴走族は町から追い出されるどころか、跡形もなく壊滅してしまう羽目となった。当事者の一人であり、霧島による「無双」の光景の唯一の目撃者である赤松は、その時のことをよく覚えている。その時から霧島を怒らせないと誓った記憶と共に。

『二年の霧島が暴走族を壊滅させた』という噂は今でも広まっていた、ゆえに学校の中では彼は敬遠される存在だった。迷惑だった連中を退治してくれたことは感謝しているが、やりすぎなほどの暴力が、いつ自分たちに向けられるかわからない。クラスメイトの霧島を見る視線は、そんな複雑な感情が渦巻いたものばかりだった。そうでない者なんて赤松一人くらいだ。

「そんで、そいつらは？」

「いきなり殴りかかってきたから、適当に腹を叩いたら帰ってくれたよ」

予想通りの結末に、むしろ笑みが浮かんでくる。その時の様子は、まさに傑作だっただろう。

「……どうした？　いきなり笑い出して。なんか気持ち悪いぞ」

「うるせえ、お前に言われたかねえよ………それで、その後は？」

「ああ、そいつらを追い返した後、結局そいつを家に連れて行くことにしたんだ。また同じようなやつが来ないとも限らないし」

「ふむふむ」

「最初はそいつ、凄く嫌がってたんだ。まあさっきまで殴ったり殴られたりを見てたから、怖がってたんだと思うけど。でも俺として



は心配だから、なんとしても連れ出したかったし。で、何とか説得して納得してもらって、一緒に家に言ったわけよ」

「ほうほう……まあ、そりゃあ怯えても仕方ないだろうな。目の前で喧嘩があった後じゃあ、自分がどうなるか分かったもんじゃないし。引つかかれたりはしなかったのか？」

「ああ、顔面を殴られそうになったけど、ギリギリでかわせて良かった」

「……猫ってパンチとかできたっけ？」

そもそも拳を握ることすらできないんじゃないか？

「……まあいいか。じゃあ、今はお前のお留守番ってわけか」

うん、と頷く霧島。

「うちは両親どっちとも県外にいるし、ちょうど良かったよ。もしいたら絶対に怒られてた」

「『家では猫は飼えません！ 早くもとの場所に返してきなさい！』ってか？ 何かドラマみたいな感じだな」

「んー、いや、多分そういうのとは違うけど。まあそんな感じだろうな。二人とも、俺と違って生真面目だし」

声が深刻そうな色を持ち始める。霧島がそう言うのなら相当なのだろう、と赤松は苦笑した。

「そりゃ帰って来たときが大変だな。……そっぴや、その猫病院には連れて行ったのか？」

その質問に対し、霧島の目がぱちぱち、と大きく瞬いた。何を言

つてるんだ、と言いたげな表情だった　まさか。

「もしかして、連れて行ってないのか？」

「いや、腹は減ってたみたいだけど別に健康そうだったし、夕飯食べさせたら機嫌良さそうにしてたし。なに、病院って連れて行かないやダメなのか？」

「当たり前だろ」即答する。「いいか、猫つてのは色んなところから病気持ってくる可能性があるんだぞ。基本色んなところに行くからな。元々野良だったらなおさらだ。傍目には元気そうに見えても死に関わる病気にかかっている可能性だってあるんだから、拾ったらすぐに病院に連れて行って診てもらうのが普通なんだ。お前そんなことも知らないで猫を拾ったのか？」

「う、うん」

早口で一氣にまくし立てる友人の姿に驚いたのか、霧島はややぎこちなく頷いた。背もたれに深く背を預け　というか、大きく仰け反らせている。そこで赤松は、自分の顔がやけに霧島に近付いていることに気付いた。興奮して話すうちに、いつの間にか顔を寄せてしまっていたらしい。

目を丸くしたままの霧島を見て、ゴホンと咳でごまかして顔を離す。背中にくっつか好奇の視線が刺さるのを感じて振り向くと、三人ほどの女子たちがさつと顔を明後日の方向に向けた。確か、よく『BL』なるものの話をしている文芸部のグループだったか。そう考えたところで、赤松の顔が青くなった。

そんな彼の様子に、再び霧島が疑問の目を向ける。

「……どうしたんださっきから、笑ったり早口になったり顔近づけたり青くなったり。はっきり言って気持ち悪いぞ」

「……」

さすがに今回はうるせえと返す気力も出ず、「何でもない」と女子グループから目を背け、顔を戻す。

「……ま、まあともかく、今週中にでも病院に連れて行ったほうがいいぞ」

「？ ああ、とりあえず今日帰ったら、具合悪くないか聞いてみるよ」

そこで予鈴が鳴り、赤松は空になった弁当箱を片付け、元の席に戻っていった。

結局、霧島の最後の言葉の違和感に彼が気付くことはなかった。

学校が終わり、霧島は真っ直ぐに家へと帰宅した。元々帰宅部である上に今日はバイトも休みなので、まだ外が明るい内に家に着いた。

「ただいまー」

玄関に入ると同時に声を上げるが、返事は当然返ってこずに、居間のほうからテレビのものらしい声が聞こえてくるだけだった。

まあそりゃそうだ、と思いながら靴を脱ぎ、居間へと向かう。きつと「猫」はそこにいるのだろう。

リビングのドアを開けると、予想通り、「猫」がいた。ソファにだらしなく寝転がって、テレビを眺めている。長めの茶髪がカーペットの上に落ち、奇妙な色の滝を作っていた。

ただいま、ともう一度言つと、「猫」は緩慢な動きで振り向き、「ん」軽く手を上げた。とても居候がするような態度ではないが、いつものことなので気にすることはない。彼女と過ごした数日の間で、すっかり慣れた霧島であつた。

「留守の間何もなかったか？」  
「ん、別に」

端的に 実にどうでもよさそうな態度で答える「猫」。視線はすでにテレビの方に戻っている。その様子を眺めながら、「だらしないなあ」とここ数日で何度目かの感想を口にした。「猫」は白い大きめのシャツに真つ赤なジャージと、およそ『思春期の女子』というにはいささか色気の無い格好をしている。まるで深夜に見かけるヤンキーめいた女性のようなだった。ややボサボサになった茶髪もあつて、どう見てもそのようにしか見えない。

「猫」曰く部屋着はこれ一つしかないし、スカートを家の中で履くのも面倒臭いらしい。霧島としては少し説教したいくらいなのだが、女性側の事情など全く知らないので激しく言うことはできない。

その上ああ見えて掃除・洗濯・料理などの家事はしっかりやってくれているので、文句なんて言いたくても言えない状況だった。すっかり家での生活に慣れてやがる。

小さく溜息を吐いた後、霧島は今日の昼休みに友人と交わした話を思い出し、その場に鞆を置いた。

いつまでも自分の部屋に行かない家主を訝しく思ったのか、「猫」が再び顔を向ける。そんな彼女に近付いた霧島は顔の横に座り、目を丸くした彼女の頬に両手を当てた。

「!?!?!? ……んな、な!?!」

「猫」が大きく顔を上げるのにも構わず、霧島はそのまま顔を寄せる。両手に伝わる男性とは大きく違う柔らかな頬の感触。「猫」が顔を赤くするにつれて、ゆっくりと熱を持ち始めていく。口を半開きにして大きく見開いた目を向ける「猫」の顔を、霧島はまじまじと隙間なく観察する。顔は若干赤くなっているものの、顔色自体は悪くない。目も問題無いようだし……あ、ニキビ発見。あとで教えておこう。

三十秒ほど嘗め回すように見た後で、ようやく顔を挟む手を放し、彼女を解放する。既に上半身を起き上がらせていた「猫」はずりずりと後ずさりし、ソファの背もたれに深く背中を押し付けた。顔は以前赤いままだ。

「な、ななな、なななな、何すんだよ!」

「いや、お前が病気になってやしないかって思ってたさ。気分が悪いとかないか? 吐き気がするとか、どっかが痛いとか」

「き、気分は悪くないけど気持ち悪い! いきなり何なんだよ!」

「なに、気持ち悪いってことは、吐き気か? よし、急いでトイレに行こう。動けないなら俺が運んで」

「あ、ああ、あたしに触るんじゃないやねええええ!」

「ふがぬんっ!」

悲鳴混じりのアッパーが顎に直撃し、リビングに霧島の倒れる音が大きく響いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9733v/>

---

野良猫

2011年10月8日10時56分発行